

## 日本統治期台湾における日本人主流派教会による台湾人伝道

——一九三〇年代の日本基督教会および日本組合基督教会を中心に——

高井ヘラー 由紀

### 一 はじめに

日本植民地統治期の台湾における日本人教会（以下、在台日本人教会）による伝道活動は、基本的に「日本人による日本人のため」のものであり、日本内地における地域教会とほとんど変わらない、いわば台湾人社会から隔絶された性格のものであった。この傾向は、在台日本人教会のうち「主流派」と分類できる四派、すなわち日本基督教会、日本聖公会、日本組合基督教会、日本メソヂスト教会において特に顕著であり、対照的に「非主流派」の代表格といえる日本ホーリネス教会では、日本人伝道のみならず、日本人および台湾人双方による台湾人伝道が積極的に行われた。

右の事実をふまえつつ、本稿では前者日本人主流派教会による台湾人伝道の取り組み、具体的には、一九三〇年代の台北における日本基督太平町教会および台北第二組合基督教会に着目する。主流派による台湾人伝道の実践は実際上この二教会の設立に限られ、そのいずれもごく小規模なものにとどまったが、それは在台日本人教会史において極めて重要な意味を持ち、戦後の台湾に引き継がれたことによって台湾キリスト教史にも足跡を残している。また、実現したのは一九三〇年代以降と遅かったが、台湾人伝道への関心自体はごく早い時期より、実

際に台湾人伝道に着手し得なかった教会も含め、主流派教会のうちに存在していた。したがって本稿では、これまでほとんど詳細の知られていなかった、日本基督太平町教会および台北第二組合基督教会の設立に至る経緯を、資料にもとづいて明らかにすると共に、一九三〇年代以降の主流派教会における台湾伝道論や台湾人伝道構想が、一九三〇年代における台湾人伝道の実践にどのように反映されてくるのかを考察する。さらに、一九四〇年代、「日本基督教台湾教団」を半ば強制的に成立させたことによって、台湾基督長老教会（以下、台湾教会）に深い物理的精神的な傷を残した在台日本人主流派教会が、ほぼ同時期に行われていた台湾人への伝道を通して、小さいながらも肯定的な足跡を台湾キリスト教史に残したことの意義を、在台日本人教会と帝国主義との関わりという局面からも検討してみたい。

### 二 日本主流派教会における台湾伝道論の変遷

#### 二一 一九九〇年代の台湾伝道論

朝鮮半島の覇権をめぐる勃発した日清戦争の前後、日本キリスト教界では朝鮮が教化の対象として強く意識され、台湾という存在に関心が向けられたのは日清講和条約以降であった。

台湾への伝道開始に向けていち早く行動を起こした日本基督教会（以下、日基教会）では、一八九五年七月六日第一〇回大会において大儀見元一郎および井深梶之助の視察派遣を決定、同年中に伝道者を台北へ派遣した。日基に続き、それまで外国ミッションに伝道地や伝道師の選択権限を掌握されていた日本聖公会（以下、聖公会）でも、「新領土」台湾を伝道地とする伝道局が発足し、一八九六年中に今井寿道とA・F・キングによる台湾視察伝道者の台北派遣を実現させた。一方、日本組合基督教会（以下、組合教会）では一八九六年四月、第一一回総会において台湾伝道に関する建議案が提出されたものの、ミッションからの自給独立をはかった時期と重なった

ためか実現せず、その後は朝鮮伝道に力を注いだこともあって台湾への伝道者派遣は一九二一年と出遅れた。さらに日本メソヂスト教会（以下、メソヂスト教会）は、初代監督本多庸一が日基によって既に着手されていた台湾伝道に消極的だった上、組合教会同様朝鮮伝道に力を注いだこと、メソヂスト三派合同問題などが原因で、一九三二年ようやく台湾伝道を開始した。

台湾伝道開始への動きと相まって日本キリスト教新聞誌上で展開された台湾伝道論議は、当時の日本キリスト教界に典型的に見られた西洋文明優越主義やアジアの「盟主」としての意識を色濃く反映し、「日本のキリスト教」文明による「台湾」野蠻の「文明化」征伐の図式を基調とするものであった。しかし具体的な伝道方策となるとさまざまな主張や提案があり、特に伝道対象をポリネシア系先住民族、漢族系台湾人、在台日本人三者のいずれかに設定するかにおいて各論調に違いが見られた。

たとえば「台湾伝道」幾石の鮮血を以て成就するか（『日曜叢誌』七四号、一九九六年一月一日）は、古典的な「文明」対「野蠻」の図式に基づく伝道論であったが、ここではポリネシア系先住民族が「未開」の象徴として規定され、彼らを文明化することこそが日本キリスト教徒の使命とされた。一方、漢族系台湾人への福音伝道や教育事業を通しての「文明教化」を主張した記事の代表的な例としては、「台湾伝道論（各派有志者に檄す）」（『福音新報』第七五号、一九九六年二月四日）が挙げられる。さらに、「台湾伝道事情の一斑」（上）および（下）（『福音新報』第六五号、一九九六年九月二五日、第六六号、同年一〇月二日）のように、統治者である日本人自身の「野蠻性」を憂い、その「文明化」が植民地台湾における「急務」であることを説く論調も多く見られた。いずれも、日清戦争が「義戦」と受け止められたと同様、植民地統治は台湾の文明化を志向する「義」なる事業であり、キリスト教が目指すところと基本的に一致しているとの理解が根底にあることが読み取れる。

しかし、国家権力と軌を一にするこのような立場と異なる論議がなかったわけではない。一九九六年、日基督教

会第十一回大会において、大会伝道局長に就任することとなった植村正久は、「台湾の伝道（日本基督教会の着手）」（『福音新報』第四八号、一九九六年五月二九日）において、「文明」対「野蠻」のアナロジーを一切用いることなく、日本教会は自らの資力に応じた規模の在台日本人伝道に着手し、その後台湾人への伝道を考慮すべきであるとの持論を展開した。注目されるのは、同記事において、「人類に事ふるてふ十字架の大義を唱へ、燻れる麻を熄さず、曲れる葦を折らず、一視同仁の精神を鼓吹し、自由平等の主義を發揚し、傲れる強に抗するに上帝の名を以てし、凌辱侮蔑に泣くものを慰撫するに耶穌基督の同情を以てする」と述べられていることである。これは、植民地台湾という文脈においては「弱者」被統治者である台湾人に寄り添うものとしての福音理解であった。在台日本人伝道から開始するという伝道方策自体は他の論者とも共通していたが、「文明」の高みにある「強者」の宗教としてのキリスト教理解が一般的だった当時の日本キリスト教界にあって、「十字架」の低みにまで下がった「弱者」の視点から台湾伝道を動機付けた意義は評価されるべきであろう。

## 二二二 一九二〇—三〇年代の台湾人伝道論

以降、主流派教会による台湾伝道は在台日本人伝道に終始していった。台湾人への伝道は意識されつつも、在台日本人への伝道が最も緊急且つ現実的な選択であり、対照的に台湾人伝道に着手しようにも、言語文化の障壁や資力人材不足という問題に加え、台湾教会が既に旺盛であるという現実があったためである。しかし一九二〇—三〇年代になると、より明確に台湾人を伝道の対象として意識した論議が浮上するようになる。その背景には、領台より三〇年前後が経って日本語の流暢な世代が出現し、日本語を用いての台湾人伝道が可能な状況が生まれつつあること、高まる軍国主義の圧力と「内台融和」政策によって植民地台湾社会全体の「同化」が進む中、キリスト教界においても「内台融和」が志向され、台日教会間の距離が近づいていたこと、などがあった。

このようにして一九二〇年代から一九三〇年代に日本キリスト教新聞誌上で改めて展開された台湾人伝道論は、領台初期の伝道論のほとんどが、台湾を見たことのない教会オピニオンリーダーたちによる「机上の空論」だったこととは対照的に、元あるいは現職の在台日本人教職者および台湾人信徒自身による、より具体的なものが大方を占めていた。植民地台湾の現実を知る彼らが、いかなる問題意識と理想をもってこの時期に日本教会による台湾人伝道の必要性と可能性を主張したのか、以下、日基、組合、聖公会、メソヂストの各教会関係者による記事を見てみたい。

① 日基教会における台湾人伝道論—蔡培火と植村正久

日基教会では、植村正久が前述の伝道論において「先づ第一に彼の島に在る日本人の間に伝道し、而かして後徐ろに帰化支那人土蕃等にも及ぼさざるべからず」と主張して以来、在台日本人伝道がその基本路線であり、その結果、一九二〇年代までには最大の在台日本人教会へと発展していった。しかし植村自身は右の一節が示す通り、日本人伝道のみで満足することなく、将来の可能性としての台湾人伝道を射程に入れ、自らも九回台湾に渡り、台湾教会関係者としては面会するのみならず、東京においても台湾からの留學生の世話にあたるなどしていた。また台湾人の政治的権利を擁護する立場を堅持し、「福音新報」において台湾における人種差別の撤廃や自治の実現を支持する記事を積極的に発表した。

植村が「世話」した台湾人信徒の中には、後に台湾教会の重鎮とされ在台日基教会にも好意的に援助を提供した人々があったが、そのうちの一人である政治運動家の蔡培火は、一九二一年九月八日発行の「福音新報」第一三六七号において「台湾伝道を展開せよ」と題する記事を発表、日本教会による台湾人伝道の不在を批判し、その開始を促した。以下はその一部である。

(中略) 台湾に於ける日本の教会は、日本人に対する伝道については熱心であり誠実である。然し台湾人に対する伝道は、全く零であると言つても過言でないくらい冷淡である。否な冷淡であると言ふよりも、其処に心が寄らないやうに見受けられるのである。是れは基督者としての台湾人の頗る遺憾に感ずる所である。固より日本の基督者は、台湾の基督者に対して親切である。未信徒の台湾人に対しても同情と厚意をもって居る。けれどもこれは単なる交際の上の親切である。厚意である。決して一つ教会、一つ国民としての同情でも厚意でもない。此処が台湾の基督者としての不満に感ずる所である。

結論は単純であり明瞭である。今後台湾に対する伝道の方針を革めて、日本人に伝道すると同時に、台湾人への伝道をも開始することである。日本人が台湾語を習ひ、台湾人と同様な食物を食ひ、台湾の着物をまとい、台湾式の家屋に住みて、台湾人を基督教に導くことである。(中略)

仮に一步を譲つて、台湾にある牧師及び伝道者に一言を呈したい。諸君はなぜもし教会の門戸を開いて台湾人を容れないか。なぜ日本語を知れる台湾人に伝道をして、彼らを日本人の教会に導くことをつとめたいか。是れは理想を離れた現実の問題である。台湾人の寄り付き難いやうな、若くは台湾人を寄せ付けないやうな態度は、新領土に対する伝道の根本を誤るものでなからうか。(傍点引用者。以下同)

日本人キリスト教徒と同じ信仰を有し、政治的には同じ国家に属しながら、「一つ教会、一つ国民」であり得ない現状、「台湾人を寄せ付けないやうな態度」を取り続ける日本人教会に対して、台湾人キリスト教徒の抱く不満がここに代弁されている。常に日本人の側に「同化」することを求められてきた台湾人に福音を説くには、逆に日本人が台湾人に「同化」しなければならないというのが、蔡の要求するところの伝道の姿勢であった。

興味深いことに、蔡の呼びかけに最初に応答したのはほかでもない植村であった。「福音新報」第二一六三号（一九三七年八月二二日）に掲載された蔡培火の回想によれば、前述記事が発表された翌一九二二年の四月、植村は蔡が台湾において政治活動を継続できるように生活費として毎月一〇〇円を工面することを申し出ると同時に、時間に余裕があれば台湾伝道に協力してもらいたいと依頼した。蔡が台湾人である以上、これは台湾人伝道の要請であると理解して間違いなだらう。これに対して蔡は、政治運動あるいは伝道の資金は台湾人が供出すべきであるとして辞退、しかし植村が引き下がらないので、もしも台湾人からの資金援助が受けられない場合には受け取るが、植村がどうしても台湾のために財的支援を提供したいならば、「台湾語を使用する内地人の伝道者を派遣」してくれば協力する、と約束したという。

このように、植村の構想する台湾人伝道が、日本教会の支援下に台湾人自身が担い、民族自決運動同様の精神で進行するものであったことは対照的に、蔡培火は、日本人が台湾人の立場に立って伝道活動を行うこと、もしくは在日日本人教会が台湾人に門戸を開けることの重要性を主張したのであった。

## ② 組合教会における台湾人伝道論Ⅱ周再賜・平賀徳造・長谷川直吉

一九一〇年代、組合教会は朝鮮において総督府の財的支援を背景に大規模な朝鮮人伝道事業を展開した。この事業は最終的には朝鮮人信徒の教会離れにより一九二〇年に終結したが、その後、台湾人伝道の可能性にも目が向けられるようになったことが、一九二五年七月二日発行の『基督教世界』第二二六七号において「台湾伝道特集」が組まれたことより推察できる。この特集号冒頭の社説「台湾人伝道」では、台湾領有から三〇年が経過しながらも日本教会による組織的な台湾人伝道が行われていない現状に対し、伝道とは言わずとも台湾人信徒との交流を通して「同胞としての真の実を挙げべき時機」が来ているのではないかと、そしてその使命に最もふさわし

いのは朝鮮人伝道を通して朝鮮会衆教会を成立させた経験のある組合教会である、と述べられている。これに続いて台湾キリスト教事情に詳しい周再賜、平賀徳造、長谷川直吉の三者が、それぞれの見地から台湾人伝道に関する具体的な論議を展開している。

最初の記事「台湾伝道問題所感」を執筆した周再賜は、京都へ留学した最初の台湾人であり、同志社神学部卒業後、オペリン大学、シカゴ大学、コングリゲーションナルチャーチ神学校、ユニオン神学校への留学を経て、同志社大学助教および前橋共愛女学校校長を歴任、長老教会出身ではあるがリベラルな信仰を有していた人物である。この記事の中で周はまず、台湾では過去二〇年間の急激な進歩や変化の結果、「青春期に於て青年が悩む如く一種の不安の気分」すなわち「新時代の実現の悩み」が漲っており、英国およびカナダ長老教会ミッションによる在来の「伝道法も人物も決して満足とは云へない」と指摘する。これは、近代教育を受けた台湾人青年層における民族意識の高まりや、キリスト教界における自由主義神学の台頭という世界的潮流に対し、あくまでも保守神学を固持し、政治活動に不干渉の立場を貫く長老派ミッションの限界を示唆したものである。とはいえ、周は日本教会による台湾人伝道という考えには懐疑的であり、「台湾人間の伝道は台湾人によつて為されなければならず」、「少なくとも台湾人の協同なしには」無理であると主張する。台湾人としては例外的に日本内地において助教授や校長職などを歴任しながらも、被統治者であることの不条理を自身痛いほど経験してきた周にとつて、日本人キリスト教徒が、欧米宣教師主導の伝道に反発しながらも台湾人伝道において主導的役割を果たすという発想には、反感を持たずにいられたのだろうか。

周の言及する「新時代の実現の悩み」とそれに応えることのできるキリスト教の必要性、という認識に関しては、続く二名の日本人論者も共通している。一九二四年に台北組合教会に赴任した平賀徳造は、「教育ある〔台湾人〕青年たちは現存の〔台湾〕教会にて基督教の真髄を握り得ず、さらばと云つて単純な御利益宗教で満足する

事は出来ない。(中略)殊に内地で教育を受けた青年信者及伝道者は悶えを感じて居る」と述べており、平賀の前々任者の長谷川直吉も、自身が知己を得た台湾人青年キリスト教徒が、「政治には不満を漏しつゝ、も(中略)自分の教会の説教や思想に満足」できず組合教会の集会に参加していた状況に言及している(括弧内補足引用者。以下同)。

このような状況を鑑みて、平賀は特集号記事「台湾伝道に就て(上)」および翌第二一六八号(一九二五年七月九日発行)の「台湾伝道に就て(下)」において、従来のミッションによる宣教方法では台湾キリスト教の将来に見込みはなく、「台湾伝道を真に援助する者は内地人基督者」であると言いつける。ただし宣教師が尊敬すべき存在であることには変わりはなく、日本人キリスト教徒の使命は、宣教師の「欠点を補ひ以て台湾を徹底的に教化することである、という。この「異民族」伝道は「イエス・キリストを正直に伝道する事に立脚す可き」であつて、「総督府を背景として遣る様では失敗」であり「政治と全然關係を絶たねば」ならない。そして「真実に台湾人の靈魂を愛」する「現代的マカイ大聖」のような人物と、その人物を終生援助する篤志家の両方が与えられたならば、「台北か台南の台湾人町に教会を設立す可き」である。既に「内地人が高い処から見下して台湾人を救はうと云ふ態度の時代は過ぎた」のであり、この事業も「台湾人伝道と標榜して遣る可きではな」く、「吾らも共に救はれたいとのねがひを以て台湾人の町の真中に内台人の区別を口にせず福音を叫ぶべき」だ、という。平賀の主張は、一八九〇年代の西洋文明優越主義に対し、福音の前に伝える側と伝えられる側の間に文明的優劣はないとする点、朝鮮伝道事業への反省をふまえて伝道と政治的権威との関わりを否定する点、民族意識を抑圧しようとする総督府の政策に対し、台湾人を「異民族」と認め安易に日本人と同一視しない点など、一九二〇年代の在台日本人教職者としての良心を感じさせる。しかし平賀は、当時の組合教会が人材資力共に貧弱であることを鑑み、最も現実的な方策としては、「彼等〔台湾人〕の自発的な運動として台湾人伝道を始め組合教会が此を援助する方

法に出づるより道なしと考える」と、最終的には周と同じ結論に達している。

台湾人伝道を「異民族」伝道と位置付ける平賀に対して、台湾離任後朝鮮京城組合教会に赴任した長谷川直吉は特集号記事「在台當時を追想して」において、台北組合教会在任時(一九一三—一九二〇年)を想起しつつ、台湾は「日本の領土」である以上、台湾伝道は「日本人が(中略)我が国民なる台湾人と提携協力して大にやるべし」と述べる。これは澤山保羅の「日本人の伝道は日本人がやるべし」という主張に共鳴を覚えていることとされているが、一方、その前年に発表した「朝鮮人伝道に就て」(『基督教世界』第二一四号、一九二四年六月二〇日)では、「理想的に言へば朝鮮人伝道は朝鮮人がなすべきであつて、止むを得ざる時代或は場合の外これは外国人宣教師や内地人教会のなすべき事ではあるまい」と述べられているのである。なぜ台湾人伝道は台湾人がなすべきとならないのかについては議論の余地があるが、一つの推測としては、朝鮮における民族自決運動が植民地支配からの解放に直結していたことに対し、台湾のそれが一九二〇年代までには植民地という枠組み内での自治権や政治的権益の獲得に向けられていたことから、「二等国民」扱いされていた台湾人を日本人同等の「国民」と言及することによって、肯定的意味を持たせたと考えられなくもない。そのような解釈からすれば、台湾人の民族性を尊重する平賀のスタンスにも通じるといえよう。

以上、周、平賀、長谷川の三者に共通するのは、英国およびカナダ長老教会ミッションの力量不足、台湾長老教会が神学的思想的な「貧弱」さ故に一部のエリート青年層の支持を得られない現状、逆に「豊富」且つ「進歩的」な日本のキリスト教が台湾人伝道において主導的もしくは補助的な役割を果たすことができるとの認識である。これは自由主義神学を積極的に取り入れ、思想面でも民族自決主義を肯定していた組合派の論者ならではの批判的見地であつたといえる。

## ③ 日本聖公会Ⅱ松田真澄

聖公会では台湾人を対象とする伝道活動は結果的に行われなかったが、その意図が複数の教職者の間にあったことが一九二〇年代以降の資料より散見できる。中でも台南聖公会の長老（司祭）をつとめた松田真澄は明確に台湾人に対する伝道の使命感を有し、その可能性を探った人物であった。

台湾赴任時に「基督教週報」に掲載された「余が渡台決心の理由」（第四四卷第一号、一九二一年一月一日）によると、松田は前任地であった岡山において、日本軍による台湾武力制圧時に両親を殺され「怨恨骨髓に徹して居る」台湾人と出会い、「当時征台軍に加わつて居た私は一種の感に打たれ、仮令ひ国家の為とは云へ、斯く台湾の人を殺して居る私はどうしても彼らに向つて償ひをなさねばならぬと斯様に感じて居つた」ところ、伝道局長の貫民之介から勧められて台湾行きを決心したという。したがって在台日本人伝道が主な任務とはいへ、かつて台湾人を殺した「償ひ」として「本島人」そして「台湾蕃人」までも「神の恵」を伝えることが、その渡台の志の原点であった。

しかし、いったん台南に赴任すると、松田は台湾人伝道への思いと民族自決主義への警戒の間を揺れ動くことになる。赴任から約半年後の報告では、台湾人が八割を占める台南において聖公会の基礎を定めるために、将来教職につく人物を台湾人青年の中から得たいと述べつつ、「本島人が覚醒し来り民族自決の世界的潮流に動くようなどきに明治大帝の御偉業を空しくせしめないため、我らの負える責任はクリスチャンの双肩にあり」と、日本帝国主義を擁護し民族自決主義に対抗するものとしてのキリスト教理解を示している。その後、一九二六年秋までには数名の台湾人求道者が毎週の礼拝に参加するようになり、日本人および台湾人双方を対象とする聖公会伝道が具体化し始めていた。しかし一九三二年の報告では、「教育の進歩につれ台湾人は台湾は台湾人の土地なりといふ観念をもちはじめた。台湾人も内地人も同じ日本帝国の人民として手を握り合ふためにはた、基督教による

より外に方法はない」と、民族自決思想への警戒感をさらに強めている。

その後の松田は、次第に官民の賛同を得ながらの社会教化運動に関与するようになっていった。一九三五年に総会に提出した報告では、「内台人融和」を目的として台南基督教教職連盟を組織したこと、また州当局者と協議の上、台湾人の「文化的教養」を高めるための「文化的啓蒙運動」を企画し、それを「永久的の組織と為す」ための活動に関わっていたとあり、伝道局への報告でも、「如何にして本島人を教化すべきや」というテーマで知事、内務部長、教育課長、高等工業学校長、中等学校長、師範学校長、神官などと語り合う懇談会を毎月一回開いていたとある。当時の台湾における「内台融和」政策が背後にあるとはいへ、日本人キリスト教教職者の中でも例外的に積極的な教化運動への関わり方であった。このことと関係してか、翌一九三六年一月、松田は「突然」台南聖公会を辞任、翌一九三七年三月には離台している。松田のケースは、民族自決思想の拒否と台湾人への伝道とが、実質的には併存不可能だったことを示しているように思われる。

## ④ メソヂスト教会Ⅱ藤田一市

日本メソヂスト教会では、一九一六年に渡台視察した平岩愼保が、「護教」誌上でメソヂスト教会による台湾伝道は漢族系台湾人を対象とするのが最も適当であると主張する伝道論を主張、その後も青山学院神学部在学中の真野萬攘が「台湾の同胞の心の中に這入ることを願つて」全島を視察した後、台湾における神社について発表した文章の中で台湾を含む外地伝道の重要性を説くなど、台湾人伝道としての台湾伝道は少なからず意識されていたが、一九三二年に開始された台湾伝道は在台日本人を対象とするものであった。しかし同教会最初の台湾派遣伝道者であった藤田一市は平岩に通じる伝道理解を有し、積極的に漢族系台湾人への伝道の可能性を探ろうとしていたことが、赴任時の記事より読みとれる。

【日本メソヂスト新聞】に掲載された「台湾の伝道」(一)、(二)、および(三)(第二一九号、一九三二年八月一九日、第二二〇号、一九三二年八月二六日、第二二二号、一九三二年九月二六日発行)において藤田は、台湾教会と在台日本人教会が「現在何等の連絡を有しない。」と疎遠である現状や、「台湾はたゞ日本人ばかり住む島ではないのである。政治的には日本人であり、陛下の赤子であるけれど共、物事はそんなに簡単に行かない」「異なる民族意識を有する者が、異なる民族の支配に不平不満を持つ事は当然」と台湾人の間にくすぶる否定的感情を示唆した上で、「台湾の伝道は我等の手によりてなされ度きもの」との抱負を述べている。その理由としては、「我等宗教家の責任」とは台湾人間にある「不平不満を(中略)芟除」し、且つ台日「両民族間のよき理解(中略)を作り出す」こと、すなわち「台湾のために、日本帝国のために、又台湾の住民のために重大なる仲保の役を取」ることだからだという。また、これまで日本人教会が台湾人に対して傍観的態度を取ってきたことについては、「注意と親切心」の欠如が原因であるが、効果が速やかに現れる在台日本人伝道に対して台湾人伝道ははるかに困難である上、いずれの教派も財政窮乏をつけているために、どうしても自給の精神が先に立ち、財政的基礎の建てられる方面に向いてしまった結果、台湾人伝道の不在につながった、と分析する。その上で、今後の台湾人伝道はすぐ結果が得られるものと考えられるべきではないとし、台湾人は「協同的精神に欠けている」ため、まず「一国家人としての教養」を与えなくてはならない、それには相当の年月を必要とする、という。さらに「教養ある」台湾人信徒は台湾人教会の雰囲気合わないといつて出席せず、かといって日本人ばかりの日本人教会にも行く気がしないため、台湾人街や台湾人部落の中に教会を設立すべきである、と提案した。

このように藤田は、台湾人が植民地支配に対して有する不満や日本人教会による台湾人伝道不在の原因を的確に分析しながらも、台湾人に「一国家人としての教養」を与えることを伝道の一貫として考えるなど、帝国主義的な教化意識を脱しきれなかった感がある。早くも翌年には、台湾人への伝道は「台湾の事情が解ればわかる程、

容易でない」と述べ<sup>①)</sup>、その実現はままならなかった。

### 三 日本基督教会による台湾人伝道——太平町教会

日基督教会では、前述の植村正久による蔡培火への台湾人伝道協力依頼は不発に終わったものの、一九三〇年代になって台北日基督教会牧師上與二郎を中心に台湾人伝道が行われ、太平町教会の設立に至った。戦時中に設立された「日本基督教台湾教団」問題では台湾教会関係者に否定的な感情を残した上與二郎であるが、それに先立つ日基の台湾人伝道を指揮したのもまた上與二郎であった。その太平町における台湾人伝道が、いかなる動機から開始され教会設立に至ったのか、またその意義は何だったのかを、以下考察する。

#### 三―一 太平町教会の設立<sup>②)</sup>

在台日本人教会による初めての台湾人伝道の試みでありながら、太平町教会設立に関する資料は少なく、一九三三年三月に伝道活動が開始されたことが「福音新報」に記載されている程度である。これは、太平町における伝道が台北日基督教会総勢で行われたものではなく、上與二郎牧師を含む少数派によって進められた活動であったためと推測される。

一九一八年台北日基督教会に赴任した上與二郎は植村正久の門下生であり、その精神を引き継いで「不平分子」(台湾民族自決主義に同調する青年たちを指すと思われる)の集まる台湾人夏期学校に講師として参加したり、政治運動家の蔡培火の「力になって」いた経緯より、台湾人青年層の思想に触れる機会を多く有していた。その中で、「台湾人には台湾人が伝道しているが、それで充分と言えない点がある」と感じた上は、自分の「心から出た発想」として台湾人伝道を開始したと回想している。しかし、台湾人伝道を開始すべきとの上の提案に対して、

台北日基教会役員は反対あるいはどうでも良いという無関心派が多く、積極的に賛成する者がほとんどなかった。教勢、財政、人員のいずれも充実していた台北日基において台湾人伝道への関心がこれほどまで低かったという事実は、蔡培火が前述の文面において批判した日本人教会の状況と悲しくも一致している。

当時の日本教会による台湾人伝道といえ、一九二八年以来、日本ホーリネス教会が台湾人による台湾語を用いた伝道活動を行っていたが、台北日基に最も近い大稻程ホーリネス教会には三〇代以上の者が多く、青年は少数で、どちらかというと教育程度の低い層が集っていたという。したがって、上が日本語を用いて台湾人エリート青年層を対象とした伝道を行う必要を感じていたのは、見当はずれなことではなかった。いわば、一九一〇年代よりカナダ長老教会ミッションが有していた、医学専門学校や国語学校などの総督府官立学校で学ぶ日本語の流暢な台湾人学生層への伝道の構想が、一九三〇年代になって具体化しようとしていたともいえる。

台北日基教会役員からの積極的な支持を取り付けられなかった上は、「活水会」(青年会)に属する中等学校、台北高校、高専、大学生などの青年たちに協力を依頼することになった。そのうちの一人であった萱島泉の回想によると、「一九三五年」(実際には一九三三年と推測される)イースターの日に、活水会の青年たちは上與二郎より大稻程に伝道所を作る計画があることを告げられ、その約一ヶ月後、彼らが中心となり、太平町商店街の大通りに面した一部屋で、大稻程長老教会の牧師や信徒の応援も得て、日曜学校および礼拝が開始された。この伝道所は「内に入るとむと鼻をつくたまらない臭気と塵で「パイ」の「不潔な会堂」で、奥には住人も住むという、総督府高官の集う台北日基教会の基準からすれば、かなりの抵抗を覚えたであろう物件であった。しかし青年たちと数名の婦人たちが熱心にこの活動を支え、台北日基教会の午前礼拝が終了すると椅子や机を荷車に積んで太平町まで持って行き、日曜学校と礼拝後にそれを持って帰るということをし、毎週続けたのである。

その後の教勢を概観すると、一九三三年一月には伝道集会が効を奏して求道者が四〇名起り、翌一九三四年四月の段階で既に礼拝出席者が二〇数名、日曜学校生徒が一〇〇名と好況を奏している。一九三五年には一時的に財政不足に陥ったが、一九三六年八月には、「礼拝に出る本島人兄弟姉妹達も約十名は必ず出席があり一人でも顔の見えない時には互に案づる程に親しみを増して」くるなど、台湾人出席メンバーも固定し始めた。

このような状況を受けて、一九三六年一月、太平町の伝道を拡張することが台北日基教会の臨時総会で決議され、翌一九三七年四月には、梅崎正二郎が日本神学校卒業と同時に太平町伝道所主任として着任、同年八月にはより条件の良い港町の物件に教会を移転した。梅崎は台湾語を学習し、将来的には、日曜日の午前中は日曜学校上級生の日本語礼拝および成人の日本語礼拝、午後は下級生の宗教教育、そして夜は台湾語の伝道集会を行うことを構想していた。また、教会の中心は「本島人の伝道」ではなく「本島人と共に礼拝」することであると、「太平町教会は日本基督教会が産んだ最初の本島人の教会として主に在る内台融和の実を結ぶことに大切な使命があります」との言葉が示すように、台湾人と日本人が神の前に等しく礼拝し交わりを持つことの重要性を強調した。この時期の太平町教会は、台北日基のみならず台湾長老教会からも礼拝参加などを通して応援を受け、当時台北神学校の学生で戦後は北部台湾教会のリーダー格となった徐謙信も奉仕に当たっていた。

こうして伝道者を得た太平町教会は一九三八年から礼拝献金を実施するようになり、新しい伝道計画も立てられたが、一九三九年一月には梅崎が体調不良によりやむを得ず辞任、三年後の一九四二年一月、上與二郎の次男で日本神学校を卒業して台北に戻ってきた上謙二郎が太平町教会における伝道を開始した。翌一九四三年二月には牧師就任式が行われ、上謙二郎の幼なじみで、内地の大学を卒業し台湾総督府に勤務するために台北に戻ってきた萱島暁も日曜学校などの活動に献身的に従事、また台湾人信徒の董大成、呉震春、林國煌らがいずれも家族ぐるみで上謙二郎の伝道を助け、その結果、信者は三〇名、毎週の礼拝出席者は五〇名を超えるようになった。この背後に、口には出さないものの植民地政策に批判的であり、自分と同世代の台湾人青年らの置かれた状



況に矛盾を感じ、台湾人信徒をして「僕らのいい友達でした」と語らしめた上謙二郎の人柄があったことは無視できない。しかしながら同年七月、上謙二郎は萱島暁と共に応召され、二年後にいずれもフィリピンで戦死、その伝道者としての活動は一年にも満たなかったが、信徒の間に強い印象を残した。

### 三二一 台湾人メンバー入信の経緯

太平町教会は規模こそ小さかったものの、集うようになった台湾人青年にとってかけがえのない場所となっていた。日本語を用いて日本語の流暢な青年に伝道するというだけならば、台北日基の門戸を上げれば済んだかもしれない。実際、太平町教会に集っていたのは、日本語を十分に解し、どちらかというところ静かな礼拝が好きなき者が多かったというから、彼らが台北日基教会の説教を理解するのに困難はなかったはずである。しかし、周囲の台湾人よりも高い教育を受け、日本語を流暢に操るこれらの青年たちであっても、植民地において被統治民族あるいは「二等国民」としての軛を負っていることに変わりはない。台北日基はあくまでも高等官僚などの集う上流社会、「貴族教会」であり、台湾人青年にとっては「敷居の高い」、入りにくい場所であった。対照的に、太平町教会はそのような彼らの「ために」存在する教会だったのである。

一九三八年に賀川豊彦の講演会に行ったことをきっかけに台北日基教会に出入りするようになり、一九四〇年一二月に太平町教会で受洗した董大成（当時台北帝大附属医学専門部医科学教室助教）は、「教会は植民地においては一つの避難所だった」と語っている。董は太平町教会において最も早く受洗したうちの一人で、彼の影響もあって太平町教会には医学専門部（以下、医専）学生の求道者が多く集うようになっていった。董によれば、自分も含め、医専の学生が一〇数名も太平町教会に集っていたのは、「植民地で暮らすのが嫌になって」「悩んでいた彼らが、「教会に行けば、話のわかる牧師が」おり、「学生にとって受け入れられるようなことを話していた

から」だという。また、台北日基でも早坂一郎や堀豊彦（いずれも当時台北帝国大学教授）などが植民地政策を批判していたことが、当時青年だった董大成らの共感を呼んだ。

一方、一九四三年頃に友人の呉震春に誘われて太平町教会に行き受洗にいたった林國煌は、当時医専の学生であったが、教会へ行った動機について、第一に、日本語を通じて西洋思想に接触し、比較的わかりやすいキリスト教について学んだこと、第二に、二〇代になって、「能力があったとしても将来卒業したら大学に残れない、あるいは自分が発揮しようと思っても社会はそれを許さない」といった台湾人の「境遇」「悲哀」から、「何かを求めようとしていた」こと、さらに、日本人がキリスト教を信じているということに好奇心を持った、として、最後の点について以下のように語っている。

キリスト教（の本）を読んでみると、日本人がキリスト教を信ずるということは日本の国体に合わない（こゝとが）すぐ（中略）わかる。日本の思想に合わない。（中略）その日本人がキリスト教を信じている、そのキリスト教の団体に（中略）好奇心から入ってみて、まず感じたのは、「それまで」日本人は私とは違って征服民族だった。日本人は「国民」で私たちは「二等国民」だった。その「国民」が、やっぱり苦しんでいる。キリスト教のために苦しんでいる。そういうところからかなり共感を持ったと僕は思う。それまでは、日本人の友達がいても、あるところまで来るともう話が合わなくなってしまう。（中略）ところが日本人の中にある団体がある。（中略）キリスト教を信じているからこそ苦しんでいる。それが相当アピールしたんじゃないかと思う。

植民地における「統治—被統治」の構造の中で将来の可能性を奪われ苦しむ台湾人エリート青年が、「統治者」

側にも苦しむ者があるという重層的な現実を見、信仰を得たのである。このことは、たとえ日本人キリスト教徒が「統治者」という政治的立場を捨て去ることが不可能であっても、「国体」観念と矛盾する信仰を自らの重荷として正面から引き受けることによって、「被統治者」の「隣人」となり、キリストを証しし得た、という事実を物語っている。

林國煌を教会に誘ったという呉震春も当時医専の学生であり、太平町教会において上與二郎から受洗している。呉は、日本人を通して信仰を持ったことに必然的な意味を見いだしてはいないものの、信仰に入った経緯について以下のように述べている。

キリスト教の信仰は私の人生を大きく変えていきました。私は神の目で歴史を見る事を知らず知らずのうちに教わりました。不義不正への怒りを人間本来の罪の為と受取り、自分もその一分子である事を認める事によって、怒り、復仇、の意念から、同情と愛とに換える事ができるようになりました。(中略)

今から考えると教会を通して日本人信者と交わる事が出来たのはなんと言っても有り難いことでした。戦争中灯火管制の暗闇の中を村山梅子さんや石崎キクさん達が自分たちの住居と全然方向の違う太平町の教会の集会に一週間に何度もてくてく歩いて来られ、夜十時過ぎ、また一時間もかけて歩いて帰られる力はどこから来るのだろうか。萱島暁さんがわけわからない日曜学校の子供を相手にして真面目に何を言っているのだろうか、私は一般社会に見られない神の公義とキリストの愛をぢかに見せてもらった感じでした。特に戦争への批判を私のような台湾人青年に語る、神の不可思議な力を痛切に感じました。(中略)

ここでは、植民地社会の「不義不正」に怒り失望する青年が、神との関係において「悪」の源泉である「罪」

を自分の中にも見いだすという「転換」が語られている。「一般社会に見られない神の公義とキリストの愛」を示すことは、必ずしも日本人キリスト教徒でなくても可能なことであつただろう。しかし日本人が台湾人の児童や青年たちのためにひたむきに伝道し奉仕し、統治者でありながら「戦争への批判」を台湾人青年に語る姿に、呉が「神の公義とキリストの愛」の具体的なかたちを見出したことは、偶然ではないだろう。

以上、植民地社会の「不義不正」に悩み苦しむ台湾人青年が、日本人キリスト教徒が彼らの「ために」、そして彼らと「共に」、福音を伝道し神を礼拝する場所に、自分たちの「避難所」を見出し信仰を得た体験を取り上げた。このことは、先に引用した植村正久の伝道論における、「人類に事ふるてふ十字架の大義を唱へ、(中略)凌辱侮蔑に泣くものを慰撫するに耶穌基督の同情を以てする」という一節を思い起こさせる。台北日基による台湾人伝道は、牧師の上與二郎が率先して開始したとはいえ、教会の中で力を持たない青年および婦人らと共に台湾人街の中へ入って取り組んだものであり、植民地統治者としての優位な立場を背景に帝国主義的な動機から行われたものではなかった。資金面でも細々とした献金や台北日基からの支援以外には頼らず、「福音」以外のものを売り物にして台湾人を惹き付けようとした形跡はない。小規模ではあつたが、可能な限り真摯に行われた伝道活動であつたと評価できる。

伝道教会の域を出なかつた太平町教会は、戦後の台湾に組織も建物を残すことはなかつた。しかし、台北日基教会の会堂が北部台湾長老教会に譲渡され済南教会として再出発した際、太平町教会の台湾人信徒たちがその初代長老となり、その後の教会活動を支えることとなつた。これらの信徒たちこそ、台北日基教会が戦後の台湾キリスト教界に残した最も貴重な遺産だつたといえよう。

#### 四 日本組合基督教会による台湾人伝道——台北第二組合教会

前述のように、組合教会では一九二五年に「基督教世界」台湾伝道特集号が組まれたが、台湾人伝道着手に向けて具体的な計画が構想されたのは、一九三三年のことである。それまで台湾における組合教会は台北教会のみであったが、一九二二年の設立以来二〇年が経過し、会員数四五〇、礼拝出席者数七七八〇の規模に発展していたこともあり、二〇周年を記念する主要事業として台南教会を設立することが決定された。そして同時に、「本島人を基礎としたる組合教会設立の事」「一般本島人との提携を計ること」の二点も、将来的に考慮すべき事項として採択されたのである。

##### 四一 台南教会設立計画

台北組合教会による台湾中南部への巡回伝道が開始されたのは、平賀在任中の一九二四年七月であったが、台南教会設立という可能性が浮上したのは、後任の原忠雄が一九三〇年五月および六月に南部伝道旅行を行った頃と考えられる。

その後一九三二年一月に再度台南を訪れた原は、同志社中学時代の同窓で靈南坂教会出身の劉青雲に台南教会設立のための協力を依頼して快諾を得、台北組合教会において受洗していた陳鳩水も台南集会の場所を提供していたことから、台南在住の台北教会員、求道者、同志社関係者を合わせて「内台一致の特色あり意義のある教会」が設立できるのではないかと感触を得た。後に原は二〇周年記念事業報告記事において、台南教会について「本島人内地人融和の教会」とも述べていることから、記念事業計画に記された「本島人を基礎としたる組合教会」や「一般本島人との提携」は、實際上、台南の状況を前提としていたと思われる。

こうして一九三二年九月には記念事業の一貫として、「台南教会の設立を目指し」た特別集会が劉青雲、陳鳩水、その他の台湾人信徒の協力を得て台南公会堂において二晩にわたって開催され、原は「全国の組合教会員の助力を得て、早く台南に教会が設立せられ適当なる伝道者の送られん事を切望する」と報告している。しかし、その後の台南教会設立計画は、劉青雲がメソヂスト教会信徒の妻、劉貞(さだ)と共に同教会による台南講義所設立に協力することとなるにすぎない、具体的な見通しを失っていた。一九三三年七月には、日本本国より田崎健作を迎えた際に「台南教会創設問題」に関する懇談会が組合派関係者によって行われ、台南メソヂスト教会が一九三四年三月末に劉青雲宅にて設立された後も、組合派による隔月の台南集会は継続されていたが、一九三五年三月の「基督教世界」に「台南教会は未だ具体的には計画は進み居らざるも近き将来には必ず設立を見得る事と思ふ」という一文が掲載されて以降、台南教会設立計画に関する言及はどこにも見られなくなる。ただし、「信徒団」のような形での集会は継続されていたようである。

##### 四二 台北第二組合教会の設立

こうして台湾における第二の組合教会、台日信徒連合の教会として具体的に検討されていた台南教会設立計画が座礁に乗り上げる一方、台北では意外なところから台湾人教会が誕生することとなった。

以下がその経緯である。一九三〇年の春頃、スタンダード石油会社台湾支店支配人である張鴻圖の妻を含む数名の婦人たちが、「遊び会」と称する会をつくり互いに家庭に招き合うなどしていたが、一年ほどしてこの会を「有益な集り」にしたいという意見が出されたため、牧師を招いて講話を行うようになった。原忠雄はこれを「張夫妻を中心とする台湾の上流階級の人々の集い」と回想している。会は張宅で行われるようになり、次第にキリスト教的な性格になっていった。もとより張鴻圖は妻の周慈玉が周再賜の妹であった関係で牧野虎次とも面識が

あったが、この時点ではまだ特定の教会との関係はなかったようである。その後、一九三三年夏に来台中の周再賜に説教を依頼したことをきっかけに「家庭会」が毎月行われることとなり、原忠雄がその指導に当たったところから台北組合教会との関係が生まれた。従来から行われていた婦人たちの会は「家庭会」とは別に継続され、その有志による聖書研究会も毎週行われるようになった。これらの活動はいずれも周慈玉の「熱心なる指導」により「堅実に発達」し、一九三六年一月二日には初めての洗礼式が行われ、張鴻圖、張葉月、江谷金院、李楊金鳳の四名が受洗、その二週間後の二月六日に組合教会本部より西尾幸太郎を迎え、「台北第二組合基督教教会」の設立式が行われた。設立時の集会場所は台北市官前町の張鴻圖宅、役員は張鴻圖および李金土（台北第二師範学校音楽科教員）、牧師は原忠雄による兼牧で、会員は七名であった。その後、正規の手続きを経て同年末に組合教会より伝道所として加盟を承認され、翌一九三七年六月一日付で官庁からの設立認可も下りている。一九三九年には同じ官前町に新築家屋を購入し、同年二月一日に移転記念集会を挙行、台北組合教会員の木村友吉が「応援」に加わるようになった。その後の活動については、内地からの巡回伝道者を迎えて講演会を開催した程度の記録しか残されていない。

このように第二台北組合教会の設立は事実上、張鴻圖・周慈玉夫妻の働きとその他のメンバーに負うものであり、台北組合教会の積極的な伝道活動によって実現したのではなかった。平賀の伝道論にもあったように、台湾人自身の「自発的な運動」を組合教会が支援したものであり、会堂のための不動産を購入していることから財政的にも独立していたと思われる。しかし組合教会に加盟していたため、日本基督教団成立時には「台北官前町教会」と改称、その後、日本基督教台湾教団の設立に伴って台北組合教会「維持団」に教会不動産を「強制的」に「贈与」させられた、と台湾側の記録には記されている。戦後は教会不動産を返還され、台北中華基督教公会公理堂として再出発し、今日に至っている。

## 五 まとめにかえて

一九三〇年代に実現した在台日本人主流派教会による台湾人伝道は、台湾における日本語教育の浸透の恩恵を受けつつ、日本語を用い、高学歴の台湾人青年たちや上流階級の台湾人など、在台日本人教会関係者にとってもっとも身近な層の台湾人に向けられたものであった。蔡培火の主張したような、「日本人が台湾語を習ひ、台湾人と同様な食物を食ひ、台湾の着物をまとひ、台湾式の家屋に住みて、台湾人を基督教に導く」伝道とはいかなかったが、日基の場合には台湾人街に入っている教会を設立したのであり、台湾語を学んだ伝道者もあったなど、日本人から台湾人の側に近づく努力がなされた。一方、組合教会の場合は台湾人の開始した集会を支援したことによる教会の設立で、積極的な伝道活動ではなかったが、それは、台湾人自身による台湾人伝道の支援、あるいは台湾人と協同の伝道活動、が同教会にとつての台湾人伝道であると関係者の間で認識されていた結果でもあった。

このように、主流派による台湾人伝道は小規模で伝道範囲や対象も限定されていたとはいえ、在台日本人教会史において極めて重要な働きであった。一八九〇年代に見られた台湾伝道論のほとんどが文明化への使命感に支配され、一九二〇年代以降の在台日本人教会関係者による伝道論にも教化あるいは皇民化運動の影響が見られる中、これらの台湾人伝道のケースがいずれも帝国主義的な教化意識の陥穽におちいることなく実践された意義は大きい。この実践の背後には、朝鮮伝道の反省にもとづいて日本人と台湾人を対等な存在として位置付けた周再賜、平賀徳造、長谷川直吉ら組合教会関係者による一九二〇年代の伝道論や、植村正久に代表される台湾の民族自決運動への同調、そして究極的には帝国主義への批判があると思われるのである。

しかしこれは、在台日本人主流派教会の中では、むしろ少数派であった。実際、一九三〇年代の台湾キリスト教界における「内台融和」運動に見られるような、台湾人キリスト教徒を主導する意識<sup>63</sup>、あるいは台北日基教会

に見られたような台湾人への無関心こそが、在台日本人キリスト教徒に支配的なメンタリティーだった。また、台湾人伝道に強い関心を持ちながらも教化意識を脱しきれなかった松田真澄や藤田一市のように、植民地統治当局の意向に添う形での民間の教化運動や皇民化運動に関与していった者もいた。さらには、冒頭で言及したように、台湾教会を「救済」する意図で行われたにもかかわらず、台湾教会の主体性を踏みにじる結果となった、日本基督教台湾教団の設立もあつた。これらはいずれも、植民地支配における「統治―被統治」構造の問題、特に「統治者」側が帝国意識を克服することの難しさを物語っている。官僚や教育従事者が会員のほとんどを占め、名実共に「統治者」の教会であつた在台日本人主流派教会において、これはなおさら重い「枷」だったであろう。

在台日本人教会が全体として帝国意識を克服できなかったことは、その歴史より明らかである。しかし、日基および組合教会による台湾人伝道は、在台日本人主流派教会の中でも、帝国主義を正当化する民族的優越感や教化意識を克服しつつ、台湾人の心情にもっとも近づいた部分で行われたのであり、その結果として、戦後の台湾に少ないながらも台湾人信仰者の一群を遺すことによつて、台湾キリスト教史に確かな足跡を残した活動だつたといえる。

なお、非主流派の日本ホーリネス教会が台湾においてより積極的でより広範囲にわたる台湾人伝道を行ったことは冒頭で述べた通りであるが、その主流派との比較考察に関しては、稿を改めて論じることとしたい。

(注記一) 本稿は、キリスト教史学会第五七回大会における研究発表(二〇〇六年九月三〇日、於神戸海星女子学院大学)、および『日本統治下台湾における日本人プロテスタント教会史研究(一九九五―一九四五)』(国際基督教大学大学院比較文化研究科提出博士論文、二〇〇三年六月)第六章、を加筆訂正したものである。

(注記二) 日本語文献に関しては「」、中国語および台湾語文献に関しては「◇」を使用した。

(注記三) 文中に引用した元太平町教会信徒の董大成および林國煌両氏へのインタビューは、一〇年以上も前に台北市において行ったものである。筆者の拙い設問にもかかわらず、この研究において本質的に重要な事柄を語っていただいた両氏のご親切に対し、心より感謝の意を表したい。

### 注

- (1) 拙稿「日本統治下台湾における台日プロテスタント教会の『合同』問題——一九三〇年代および一九四〇年代を中心に——」(『キリスト教史学』第五九集、二〇〇五年七月)。
- (2) 植村正久と日基教会大会伝道局とのかかわりについては、大内三郎「植村正久——生涯と思想」(日本キリスト教出版局、二〇〇二年)、一二六―一四四頁、および佐藤敏夫「植村正久」(新教出版社、一九九九年)第四章「植村の傳道局支配」(二五―二六頁)を参照。
- (3) 「植村女史を訪ふ」(『福音新報』第二二六二号、一九三七年八月五日)。
- (4) 「新刊紹介 台湾青年」(『福音新報』第一三二二号、一九二〇年八月一九日)、「台湾人民の要求」(『福音新報』第一三三六号、一九二二年二月三日)、「台湾人の請願」(『福音新報』第一三三七号、一九二二年二月一日)など。
- (5) 植村環は父の「世話」になった台湾人信徒として、蔡培火以外に、北部長老教会リーダーの陳清義、周再賜の実兄周天佑(改名後、周福全)、高再得(太平洋境教会長老、医師)夫人、高再祝(岡山教会長老、高再得の実兄で同じく医師)夫人、石舜英(萬丹教会長老、同じく萬丹教会長老李仲義の妻)の名前を挙げている(前掲「植村女史を訪ふ」参照)。
- (6) 周の経歴については、萩原俊彦「近代日本のキリスト者研究」(耕文社、二〇〇〇年)第二章「民族差別に抗した前橋共愛学園長 周再賜」(四二四―四三三頁)を参照。
- (7) いずれも特集号記事。もっとも、両者が指摘するほど台湾教会が神学的思想的に貧弱で青年層の支持を得られていなかったかについては、さらなる検証が必要である。

- (8) 初代カナダ長老教会台湾派遣宣教師ジョージ・レスリー・マックカイ (George Leslie Mackay, 1844-1901) のこと。
- (9) 日本聖公会京都地方婦人補助会第二八回年会報告、一九三二年。
- (10) 『基督教週報』第五三卷第一〇号、一九二六年二月二日。
- (11) 日本聖公会京都地方婦人伝道補助会第三八回大会報告、一九三二年。
- (12) 日本聖公会第一八回総会議事録、一九三五年、六八頁。
- (13) 日本聖公会昭和十一年伝道局報告。
- (14) 『基督教週報』第七四卷第三号、一九三七年八月二〇日、同上第七四卷六号、同年四月九日。
- (15) 『護教』第一三〇〇号、一九一六年六月三〇日、同上第一三〇一号、同年七月七日。
- (16) 『台湾の神社について』『学友会誌』青山学院神学部発行、一九二六年二月。当記事についてはキリスト教史学会会員の赤間嗣人氏よりご教示いただいた。ここに謝意を表したい。
- (17) 『日本メソヂスト新聞』第二二八八号、一九三四年一月一日。
- (18) この教会は厳密には日本基督教団成立までは「伝道所」の扱いであり、教団成立以降は「台北大稻埕教会」と改称したが、『基督教年鑑』参照、関係者の間では「太平町教会」の名称が一貫して用いられていたため、本稿もそれに準ずることとする。
- (19) 『福音新報』第一九八五号、一九三四年二月二日。
- (20) 小田部三平ほか編『神の家族—台北基督教会の想い出Ⅱ』(上齋発行、一九八九年)、四五—四六頁。
- (21) 同右、四六頁。
- (22) 謝諭華(臺灣聖教会之成立與發展) 台南、成功大学歴史研究所碩士論文、二〇〇一年、六九頁。
- (23) たごえは *Minutes of the Foreign Missions Committee (Western Section) of the General Assembly of the Presbyterian Church in Canada*, Vol. XXV, Oct. 1912, 参照。
- (24) 以下、太平町教会の開始については明記のない限り、萱島泉「太平町教会の設立と活水会」(小田部三平ほか編『台北日本基督教会の想い出』、上齋発行、一九八七年、二二—二五頁) 参照。
- (25) 『台湾基督教報』第三二九号、一九三六年八月。
- (26) 『福音新報』第一九八〇号、一九三四年一月一日、同上、第一九九二号、同年四月二日。

- (27) 『台湾基督教報』第三三三号、一九三六年二月二六日。
- (28) 同右、第三二九号、一九三六年八月三〇日。
- (29) 同右、第三三一号、一九三六年一月八日、同上第三三三号、同年一月三〇日。
- (30) 同右、第三三八号、一九三七年五月三〇日。
- (31) 同右、第三四一号、一九三七年八月三〇日。一九三九年度以降の基督教年鑑には「永楽町」と記載されているが、これが再移転のため住所表記変更のためかは確認できていない。
- (32) 『台湾基督教報』第三三七号、一九三八年二月三〇日。
- (33) 同右、第三四八号、一九三八年三月三〇日。
- (34) 『福音新報』第二二八五号、一九四〇年一月一日。
- (35) 上謙二郎は一九四二年九月に日本神学校を卒業している(『日本神学校史』東京、レバノン会発行、一九九二年)、二四一頁参照。
- (36) 『台湾青年』(台湾YMCA発行) 第一六四号、一九四三年三月。
- (37) 前掲萱島泉、二四頁。
- (38) 董大成インタビュ、一九九六年五月一日。
- (39) 同右。
- (40) 同右、および林國煌インタビュ、一九九六年五月二一日。
- (41) 以下、董大成に関しては明記のない限り董大成インタビュによる。
- (42) 『神の家族』、六八頁。
- (43) 林國煌インタビュ。
- (44) 『神の家族』、六六—六七頁。
- (45) 『台北組合基督教二十年史』、台北組合基督教会発行、一九三二年、三〇二頁。
- (46) 『基督教世界』第二四二二号、一九三〇年六月二六日、同上第二四二五号、同年七月二〇日。
- (47) 同右、第二五〇六号、一九三二年一月一日。
- (48) 同右、第二五三七号、一九三三年九月二二日。

- (49) 同右。
- (50) 同右、第二五七七号、一九三三年七月七日。
- (51) 『日本メソヂスト新聞』第二二〇五号、一九三四年五月六日、同上第二三三四号、同年一月二五日。
- (52) 『基督教世界』第二六六二号、一九三五年三月七日。『台北教壇』より転載。
- (53) 同右、第二八二七号、一九三八年五月二六日。
- (54) 台北第二組合基督教会設立の経過については、明記のない限り『基督教世界』第二七五八号、一九三七年一月二二日、による。
- (55) 『基督教世界』第二七二六号、一九三六年六月四日。
- (56) 原忠雄「乃昭和五年至昭和十七年台北組合教会概況」(手書き原稿)、一五頁。
- (57) 牧野虎次「台湾伝道紀行(一)」(『基督教世界』第一六一一号、一九一四年八月六日)。
- (58) 『基督教世界』第二七五三号、一九三六年二月一〇日。
- (59) [http://folkart.e-lib.nctu.edu.tw/collection/Egret/jin\\_tw/about4.html](http://folkart.e-lib.nctu.edu.tw/collection/Egret/jin_tw/about4.html) 参照。
- (60) 『基督教世界』第二七八三号、一九三七年七月一五日。
- (61) 『台湾青年』第一一五号、一九三九年二月。
- (62) 〈台北中華基督教会公理堂五〇週年紀念特刊〉一九八六年二月、四八頁。
- (63) 拙稿「日本統治下台湾のキリスト教界における異文化交流―台湾YMCAの事例を中心に―」(『アジアにおける異文化交流』ICU創立五〇周年記念国際会議／飛田良文ほか編、明治書院、二〇〇四年三月)、二二四―二五頁。
- (64) 藤田一市は一九四〇年に台北メソヂスト教会牧師を辞任して後、台北に残って皇民奉公会中央本部生活主事に就任している(『台湾青年』第一五三号、一九四二年四月)。
- (65) 木畑洋一は「大英帝国と帝国意識」(ミネルヴァ書房、一九九八年)において、帝国意識に関し、それが支配民族の被支配民族に対する人権的差別感・侮蔑感に支えられ、前者が後者を指導、強化、文明化するとして、支配を正当化するものであることを指摘している(四―五頁)。ほかにも帝国意識については、北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』(世界思想社、一九九九年)を参照。

(国際基督教大学キリスト教と文化研究所)